

# 俳人倉田葛三年譜 ― 春秋庵・鳴立庵時代を中心として ―

矢羽 勝幸

## 一、緒言

倉田葛三<sup>かつさん</sup>は、近世後期、特に寛政から文政にかけて活躍した俳人で、江戸の春秋庵主として加舎白雄以来の同派の俳諧を発展させ、のち相模大磯鳴立庵主、信濃虎杖庵主として相模・信濃地方の俳諧を指導振興させた傑物である。文化十三年（一八一六）に発行された俳人番付では、東方のトップ（大関）にランクされ、関東随一の名声をほこった。

「常にみだりに口をひらかず、世事をいはず、よしあしをかたらず。たまたまいひ出る句あれば、かならず人の心をさぶらす。これ一黙雷のごとしといへるたぐひなるべし。」と同時代の権威者夏目成美からその人間性を高く評価されている。

本稿は、その葛三の生涯を俳諧活動を中心に述べたもので、出生からその活動の隆盛期（文化六年）までを年譜形式でまとめた。

## 二、年譜

年譜をまとめるにあたり、その活動を示す直接事項は○印を、参考となる間接事項は△印を、編著については◎印を、▽印は葛三の作品を収める入集俳書を示した。

宝暦十二年（一七六二）

一歳

○長野市松代町荒町に出生。倉田姓、本姓塩入。<sup>①</sup>屋号ねづみ屋。「世仕于信州松代侯」（鵬斎執筆葛三伝『筑紫みやげ』。豪商という。河原綱徳の『円桂茶話』では次男。清水瓢左の『葛三全集』（以下「全集」と略称）では姉一人、妹一人の長男という。通称久右衛門（『筑紫みやげ』、諱は覃（同上）。これは『詩経』周南、葛覃よりの命名。『円桂茶話』によると幼時より松代町東条の歓喜寺に修学して住職になろうとしたが「ある時、ふと感悟することありて、加持祈祷の利益はいかなる故によるやと、師に問ひしに、即ち方便なり、と答へしかば、其方便はいかなる故にやと、押して問ひしに師答ふる事なかりしかば、是より頻に帰俗せんと思ひ発し、されど一度仏門に入りし身なれば、頭はそのまゝに有なんと、自ら誓て寺を去つて、戸倉の虎杖庵梨翁が門に入」ったのだという。また一方門人葛古の『筑紫みやげ』では既述の如く、代々松代藩士として出仕したとしている。『円桂茶話』は松代藩の篤学者河原綱徳の著作、葛古は永年葛三に師事した高弟である。いずれも文献として信用のおけるものである。目下のところその双方を信じ、藩士のち僧侶になったものと解しておきたい。

天明三年（一七八三）

二十二歳

○宮本虎杖の俳諧控『草稿 初巻』に葛三の作品が見えず、いまだ入門していないことがわかる。

天明七年（一七八七）

二十六歳

○春。虎杖の俳諧控『天明七未歳 虎杖菴草稿 式巻』（半紙綴一冊。常世田つくも書）に初めて騎鯨号で七句掲載。天明

六・七年頃虎杖に入門したものと思われる。二十五・六歳は晩学である。

梅に凝て風を机にまたんかな 騎鯨

うち霞む野に糞こくの守哉 〃

霞む野の遠き八人の眠かな 〃

我春や薺鶯に朝がらす 〃

春の風雲おこるべき峰もなし 〃

酒ありて桜に人をまつ夜哉 〃

ワすられぬ春を身に経て更衣 〃

○夏。同じく虎杖の俳諧控『席杖庵 十七言艸稿 二卷目 未年水無月』（半紙綴一冊）に四句掲載。

星晴て寝ぬ夜の思ほとゝぎす 騎鯨

夕立にとゞまらで雲の走る也 〃

夕蟬や松の香を有雨後の風 〃

日に匂ふ楨のかたしや氷の貢 〃

前書同様白雄風の句作りである。

○春。長野市松代町豊栄の虫歌山桑台院に虎杖撰の俳額が掲げられた。その「補助」役に同郷の先輩李井、越鳥、振雨とともに騎鯨号で出句する。この額はつくもの揮毫になる豪華な体裁である。

鳥すらも誓ひを鳴か花の蔭 騎鯨

松代連を中心に北・東信濃の白雄門の作品を収録する。

天明八年（一七八八） 二十七歳

○二月二十三日、釈尼栄心大姉（祖母か）没（全集）。

△四月。江戸品川鮫洲海晏寺を会場に加舎白雄芭蕉百回忌取越法会を主催する。虎杖は宗匠として参加するが葛三は加わっていない。この頃虎杖庵の執筆をつとめていたと思われる。

寛政元年（一七八九） 二十八歳

○瀬下玉芝八十賀集『やいろぐさ』（一冊）に「松城連騎鯨」として一句入集。

○春。虎杖の俳諧控『酉春 十七言艸稿 席杖庵』（半紙綴一冊）に朽仏として三句入集。

○五月十七日。江戸の白雄の春秋庵類焼、九月一日新築落成。翌年三月の長野県佐久市の倉沢薬師白雄一門俳額（白雄自筆）に「江都朽仏」として出るので寛政二年中に春秋庵執筆として戸倉から江戸へ出たのは明らかである。九月一日以降新庵の執筆として活動したことであろう。当時春秋庵には森田雅輔がいた。つくもは湖十の庵を継承。三森幹雄の『俳諧名譽談』に江戸に移るにあたり松代に家族・子を残したの記述があるが不明。とすれば松代・戸倉時代は結婚生活を営んでいたことになる。

寛政二年（一七九〇） 二十九歳

○三月。長野県佐久市野沢の倉沢薬師堂内に白雄自筆の俳額を奉納する。催主は祇因以下佐久連十名、佐久地方の白雄門下及び伊勢の往来、江戸の執筆朽仏、雅輔及び春鴻以下白雄門の判者たちの作品を記す。

名月に風さそふ園の木賊かな 江都 朽仏

この時白雄は信州行脚中、執筆朽仏を同伴していたものか、上田滞在中、同じく上田市柳町の門人岡崎如毛に宛てた十二日付（月不明）の手紙（『加舎白雄全集』下巻書簡篇参照。天明末―寛政推定）に「尚々朽仏御世話と被存候。三机（註、上田市土橋の俳人）亭などへも参可然哉と申遣候。御多用中とかく御作略可被下候」とある。翌年春に行われた白雄の信

州行脚句はつくもを同伴し朽仏は加わっていない。

○四月。白雄門判者春曉庵柴居（志遠里）の月並で高点句を得る。二月から六月までの高点句を記す書き抜きによる（『俳諧摺物図譜』八七）と天位は青鳥、地位は朽仏、人位は上毛上白井の禹川で、朽仏作は静さや二度に崩れし雨の罌粟 朽仏

○六月。同じく柴居月並で天位をとる。地位は甲州さかいの圭輔、人位は甲州暮地の琴水。

白雨の風高萱におよぶ哉 朽仏

○七月。白雄が上田の井々、麦二、如毛、三机、争茂へ宛てた手紙の中に「橘中主（註小島麦二の庵号）より被仰越候趣朽仏へ申聞候。」とみえ、巻末に「朽仏も宜と申候」とある。春秋庵で精勤していたことが知られる。

寛政三年（一七九一） 三十歳

○三月。白雄、つくもを伴つて信州行脚中、長野県南佐久郡佐久穂町平林の津金寺千手院に白雄、完来、素論三評の選句額が上る。出句者は佐久郡下の俳人が八割方、他郷からは上州より十五名、武蔵より一名が加わっている。巻中別格として虎杖、葛三、長翠（つくも）、午心の四句がみえる。

風に散るさくらに影のある夜哉 葛三

「葛三」号は白雄生前から使用していたことが知られる。

○八月。『深川集』を写す。巻末識語「東武春秋庵裡葛三坊写」。同書は上田の岡崎如毛所蔵。

○九月。春鴻がその露柱庵連中の重陽俳諧摺物を発行。露柱庵連のほか白雄門の判者、執筆（葛三、雅輔）の各一句を収む。

○白雄の著『俳諧名家録』を筆写したのはこの頃か。同書は白雄の生前春秋庵において写本。松宇文庫蔵。巻末に次のような識語がある。「都て紙員三十五葉。はじめより二十五員半まで春秋庵裡葛三坊書。其次より終迄四囲楼主人（註、岡崎如毛）寸毫をつぎて写。寛政四壬子孟春印印印」。印は如毛のものである。本書の著者が葛三という説もあるが誤り

であらう。

○九月十三日。師加舎白雄没。享年五十四。春鴻、長翠、雅輔は信州行脚中。白雄の命終をみとつたのは執筆葛三と近くに  
住んでいた判者柴居であつたという（全集）。二世春秋庵主は長翠となる。

○九月。白雄物故直後と伝えられる追善俳諧（白雄発句脇起）四句目を葛三が次ぐ（『俳諧冬瓜汁』）。脇柴居、第三心遂、  
四句葛三、五句星布ほか二十八吟歌仙。

○十一月頃。新庵主長翠の代理で長野市篠ノ井二ツ柳へ行き信州で越年（十一月九日付坂井鳥奴・可明宛て長翠書簡）。

寛政四年（一七九二） 三十一歳

○一月。信州で迎春。二月二日江戸の長翠が信州の葛三より手紙を受けたことを信州戸倉の坂井鳥奴に知らせる（二月四日  
付鳥奴宛て長翠書簡）。

○八月。武蔵本庄の田村十丸が江戸富が岡に仮庵を結び記念の摺物を発行。葛三のみ一句を寄せる。

これに答ふるとにはあらねど

心ながく世ハありたしな雲の月 朽仏坊 葛三

○夏目成美俳文「黙齋記」を書いて葛三の人となり伝える。齡三十一歳で人望の高かったことが知られる。

○巢兆編白雄追善集『一鐘集』（二冊）に次の記事がある。

十の実だも飛夜となりぬ水の月 春秋庵中 葛三

名月や紫ふるきかきつばた 雅輔

このふたりは先師隨身の人く なれば清光に対してともに文音の句を照らす。

さかもりや貝をならべて月二夜 巢兆

○十一月。白雄没後もひき続いて雅輔とともに春秋庵長翠の膝下で執筆をしていたが長翠の許可があつてこの時判者となり

独立する。武蔵八幡山の白雄門人凉化・志考・蝶飛宛ての長翠書簡（寛政四年十一月十六日推定）に「先二は葛三義何角御世話是又忝奉存候。一、葛三判者なりの事相極申候。依之御社中各様へ短冊さし上候。四時御有合之御章御認御恵投可被下候。此段春鴻・柴居ともに宜と申事二て候。尤披露ハ海晏禪寺ニおゐて亡師法蓮之砌一席之俳諧相催申候。此段御社中各様へ宜奉願上候。一、眉山子事草庵滞留。江戸蕉風ハミな〜野坊引つれ申候。」（『新編埼玉県史』資料編12）。文中「亡師法蓮」は翌五年九月の白雄三回忌法要のことであろう。その折葛三判者許可の披露を行うという。春鴻、柴居は白雄から判者を許された春秋庵の後見的存在である。

▽百爾編『ゆふぐれ冢』（一冊）恒丸編『続埋木』（刊年推定。一冊）に各一句入集。

寛政五年（一七九三） 三十二歳

○二月。春秋庵月並を庵主長翠にかわつて代撰。二月、三月分の高点を記した葛三板下の書き抜きが『俳諧摺物図譜』七八に所載。二月分は秩父の冑中が天、仙台の楠雫が地、江戸の帰童が人。高点句十九句掲載。季広、鳥習、雲帯、尋花らの句もある。

○三月。同右。天位は信州佐久の春暁、地位は相模土屋の丹鳳、人位は上毛白井の逢雨。卷末に葛三の一句。

露の間を白魚死なぬあかり哉 葛三

○三月。長野市御厨の更級斗女神社に戸部連によつて虎杖選の俳額が上り、葛三の一句が収録。

桃の朝日ものよろこびは老の情 東都 葛三

他に長翠の句も納められている。

○四月。下毛戸奈良の百爾が長翠から判者を許され記念の摺物を発行。切紙形式で縦十九・八センチ、横五十三センチ。板下長翠。葛三は春鴻、虎杖、星布、岱路、心遂、柴居らとともに別格判者の位置に掲載。「春秋菴中」と記されるのは雅輔一人。

明やすき夜をだに鶴の啼にけり 葛三

これによつても四月以前判者に就任していたことは疑いない。

○九月十三日。鮫洲海晏寺で白雄三回忌法要が催され、その折葛三の判者就任記念俳諧が巻かれたことであろう（前出長翠書簡）。

○白雄三回忌集『誹諧冬瓜汁』（春鴻編。板下長翠。半紙本一冊）刊行。前出の白雄没後巻かれた柴居脇、心遂第三以下二十八吟歌仙のほか末尾に「秋暮亭（註、大磯鳴立庵。柴居が亭主）社中よりおくられし也」と記す白雄立句、柴居脇起、相模連中による十七吟歌仙に葛三が参加（二句付句）歌仙が収録される。葛三の鳴立庵主は後のことであるがこの時大磯にいたのである。発句は

ふみにじる秋セみ寒き月夜哉 葛三

もの音の師走も闇にかかる也 江戸 葛三

追善集のためか作品も暗い。

▽鈴木道彦ら編『あみだ坊』（巢兆序。一冊）一草編『潮来集』に各一句入集。

寛政六年（一七九四） 三十三歳

○春。春秋庵を二世の長翠から譲られる。その披露のためか後見人春鴻とともに関東、信越、東北各地を行脚。

○三月二十三日。武蔵本庄の戸谷双鳥宅で双鳥、葛三、春鴻の三吟歌仙を巻く。双鳥宅を去るにあたり「紅蓼葦留別」を残す。葛三、春鴻、斗入の三人三句寄せ書き。

おしむ春ワかるゝ袖におぼえたり 葛三

（拙著『戸谷文庫俳諧資料集成』）。

○三月。本庄から武蔵八幡山（児玉町）の平野涼化、松村志考、中村蝶飛宅に遊んだか。三月二十五日付涼化、志考、蝶飛



宛て長翠書簡に「此ほど八春（鴻）、葛（三）の両叟其地御行脚と奉察、何か御風流之数々遠察いたし御うら山敷奉存候。……春・葛の両叟へ宜奉頼上候。」とみえる。三月二十五日当時江戸の春秋庵には長翠がいた。長翠は秋から冬にかけて武蔵本庄の豪商俳人戸谷双鳥宅に移住、十月の芭蕉忌を本庄の霜柏楼で主催している。

○五月。上毛草津において鷺白、鹿古らと連句。越後大鹿の都山の草津入湯記念摺物に次の作品が収められている。

一日在湯の諸風土と菰をもふし

山涼し水の流に温泉のながれ

（都山）

寔夏住の竈数く

東都行脚

春鴻

子そだての矮雞のかぶり尾さし箆して、

葛三

芙蓉をへだつしハぶきハ誰

賀陽行脚

鹿古

白露の左右の袂をうち焦し

下毛学校

可笑

月夜の鏡いふこともなく

武本庄

双鳥

花に鴈人みな船を江にうかめ

鷺白

弥彦の神に幣祭る春

別当

涼眉

このほか上田の如毛も入湯中であつた。双鳥はおそらく葛三らについてきたものであろう。以後二人は信州に入り、まず諏訪に遊んだ。「諏訪」と前書きする次の句は『寛政六寅初夏 帟杖菴草稿』に記されている。

神こゝにかぎるも涼し御柱

春鴻

○六月十五日には戸倉の虎杖庵で虎杖、得馬、丈馬、巢里、葛三、春鴻で通題（柿の花・夏の月）の句会を開いた（『寛政六寅初夏 帟杖菴草稿』）。長野市にも赴き、代官今井柳莊、岩下希言と連句を巻いた（全集）。郷里松代にも行ったことであろう。七月の盆には越後新井の金子如蘭宅に滞在（全集）、越後田村に宜中を訪い、酒田から秋田の吉川五明宅に遊

んだ。五明の『塵壺』に

秋窓一樽送けれども春鴻・葛三とも盃をわする

菊暮ぬ小樽の口もうごかさず

春鴻嘔吐のけしきなれば

菊を見る日也と医師とらへけり

などがみえる。春鴻、葛三を迎えた五明は『むら尾花』という一冊の俳諧集を編んでいる（『小夜庵集名目扣』）。

春鴻・葛三を送る

稲刈にまぎれて笠の見えず成る

五明

（『類題百家俳句全集』秋）

○岩手県に入り稗貫郡大迫町川原町の小田島英里を訪問、宿泊（『東北海海道俳諧史の研究』。盛岡の小野素郷をも訪れた（全集））。

○仙台では同門の凶南のほか鉄船と会い、名勝松島に遊んだ。後年松島には門人によって葛三の句碑が建てられるが句は他日のものである。ついで白石では乙二と会った（全集）。以後の足どりは不明だが、

みちのくを見て来て梅の師走哉 葛三

の句があるところを見ると年末には江戸へもどっていたものとみえる。葛三の陸奥行脚はこの時一回だけと思われるが太笈の『発句題叢』春之部（文政六年刊）に

やぶ入に姉葉の松をとひにけり 葛三

という作品が収められている。藪入は一月十六日、姉葉の松は宮城県栗原郡金成町字梨崎にある歌枕である。寛政六年以外にも行脚したことがあったのだろうか。

○十月十八日。葛三の行脚中、相模大磯の鴨庵主三浦柴居が病死した。「五十の上わずか」(『衣更着集』)という年齢であった。柴居は天明三年白雄から判者を許され、江戸で春曉庵を号し業俳活動をしていたが、のち鴨立庵を嗣いだ。『衣更着集』中に寄せる松露庵烏明の文章中「朽仏坊葛三病ふのうちより来つて扇枕温床す。既に末期に及んで」と記す。もしこれが真実とすれば葛三は十月の初旬には陸奥から帰り、大磯にいななければならない。それはともかくとして、柴居なき後の鴨立庵は葛三が嗣ぐこととなり、春秋庵とともに兼庵した。

▽丈左編『狭名辺墳集』(一冊)に一句入集。

寛政七年(一七九五) 三十四歳

○一月二十八日。上田の同門成沢雲帯へ手紙を出し「先は相続、御休意可被下候。」と記す。春秋庵継承の意であろう。

○二月。長翠の代よりの春秋庵月並を主催。月並は前年から行っていたか不明。高点句を記す書き抜きが『俳諧摺物図譜』七九に所載。天位は武州新戒の松雨、地位は下総曾我野の雨塘、人位は上毛太田の掌石。高点句は二十二句、中には執筆の雅輔も加わっている。遅参分四句が末尾にあり一月も行っていたことが知られる。遅参分を含め二十六句の出句地域を整理すると江戸、武蔵(新戒、宮沢、薄、榎戸、田村、野上、江原)、相模(七木)、下総(曾我野、寒川)、上毛(太田、中瀬、須川)、信濃(川中島、塚原、長瀬、松代)である。巻末は撰者吟

夜の花あまりといへば瓜に散

葛三

○二月十五日。鴨立庵前庵主柴居の遺志をついで鴨立庵ゆかり(かの「心なき」の名吟は鴨立沢で詠んだという中世以来の伝承)の西行の六百年忌を催す。同庵秋暮亭において葛三発句、脇丹人、第三末人、以下まさし、東李、智邑、宣頂、馬明、叙来、春鴻ら相模一門による一順の歌仙を巻く。

うれしさのこぶしてさぶき桜哉

葛三

記念集『衣更着集』(半紙本一冊、三十二丁)は同庵主鳥醉以来刊行されていた『そのきさらぎ』『きさらぎ集』を踏襲す

るものである。中井敬義漢文序（敬義と柴居は友人）、叙来序（寛政七年春）。跋なし。松露庵烏明の「薦円井上人六百年回香語」（寛政七年）がある。師白雄が嫌い対立した烏明の文章を載せる点、葛三の柔軟、温和な性格が察せられる。このほか葛三は烏明やその後継者坐来の年次撰集『松露（庵）随筆』にも作品を送り、交際を続けている。『衣更着集』は西行の遺詠にちなみ全国の春秋庵一派の桜の発句を集成するほか既述の葛三発句による西行六百年忌歌仙を収める。

◎冬か。白雄の『春秋稿』を復刊し『春秋稿六編』二冊を刊行する。半紙本二冊。序は春鴻（寛政七年）、小河原雨塘跋。長翠が復刊できなかった一門の撰集『春秋稿』を刊行した意義は大きい。上巻は春秋庵一門の冬と春の発句、下巻は夏・秋の発句と連句篇。連句は春鴻、葛三、舞石、漣和、鳥習、東雅、尋花、野言、野暁、雅游、雪人、冬扇、連市、其柳、莫二による歌仙、葛三、叙来、百桂の歌仙、雨塘、喬駟、葛三、蓬谷、鳥習、漣和、莫二の歌仙、みち彦、宗讃、葛三の歌仙、白雄、括囊、保吉、みち彦満連句（十四句）の四巻を収める。巻末は物故者の発句を掲げて回向としている。柴居、岱路、葵道、楚明、葛杖、政二、括囊、保吉（これのみ四句）、白雄（二句）。

△春鴻編か『さがミのはる』（刊年推定。寛政七―享和三年。一冊）、鹿古編『はなのつと』（一冊）、三車編『こまづか集』（刊年推定。一冊）に各一句入集。

寛政八年（一七九六） 三十五歳

○三月。春秋庵月並を行う。書き抜きが『俳諧摺物図譜』八十に所載。天位は蓬谷、地位は六亀、人位は麦雨。高点句は二十六句、二月分遅参句四句。合計三十句の出句者を地域別にみると、江戸、武蔵（新海、毛呂、秩父萌田、秩父野上、中瀬）、相模（厚木、神奈川）、下総（曾我野）、上毛（北牧、草津、鬼石、太田、伊香保、中村、吾妻、高崎）、信濃（南原、池田、片倉、小諸、長瀬）、陸奥（仙台）。巻末の選者吟は  
とくよりも盛なりしや藤の花 葛三

○春。信州佐久連中の春興摺物を発行。板下葛三。出句者は家副、橘人、季広、也足、葛三。「たツの春」とあり文化五年

とも想定される。『俳諧摺物図譜』二六五。

○春。江戸連中の春興摺「春日漫興」を発行。舞石、野暁、野言、東雅、仙花、奚車、雪人、連市、青監、尋花、鳥習、漣和、風酔、「春秋庵中」として執筆二名（雅輔、冬柱。冬柱は後の冬柱庵柴居か）。一行空白を置いて一派の重鎮春鴻、みち彦、葛三の三句がある。『俳諧摺物図譜』二六七。

山陰や同じやうなる里の梅

葛三

○春―夏。関東地方を行脚したか（全集）。

○春。虎杖俳諧控『寛政八丙辰玉春 虎杖葺艸稿』に十句掲載。いずれも春の作。

○冬。『春秋稿』七編刊行。半紙本二冊（大鬼）。序・跋はなく、巻末の文章に「寛政八年菊月既望」がみえ、冬頃の刊行であろう。大巻は春、夏の発句、鬼巻は秋・冬の発句と歌仙二巻、師白雄の吉野山紀行を翻刻する。板下葛三。本書は従来編次外とされてきたが袋の出現により七編と確定した。発句編は季語別の編集。出句地域は白雄時代とかわりがない。門人、知友のほかに関更、玉屑、重厚、五明、丈左、月居、大江丸など名家の作品も収める。葛三の句は二句。

とくよりも盛なりしや藤の花

葛三

世にすめば師走の梅もあまた見る

連句は「袖が浦より袖にきたりしをこゝにとり出て」と詞書して神奈川の蓬谷と台鷺で巻いた両吟歌仙と「旅よりかへりて旅人をなぐさめにほくなし。道すがらのあやしきをとりに出して」と詞書し

それときく湯川をわたる夏野哉

葛三

を発句とし、掌石の脇、鳥習の第三による三吟歌仙である。詞書によると葛三はこの年夏旅行をし、「湯川」なる土地に行つた事実を知る。

○冬。信濃行脚（祇因宛て鳥習ら書簡）。戸倉虎杖庵で越年か。虎杖の『寛政九年丁巳元旦 草庵日々稿 帟杖菴』のはじ

めに

なを旅のあらましを

更級の流にそふて年暮ぬ

葛三

行水の川木は年の薪哉

がある。

▽猿左の手控『諸々文通之咄、近頃行脚之咄』（一冊）、鳥明編『松露庵随筆』（一冊）、文兆編『有明山』（一冊）に各一句入集。

寛政九年（一七九七） 三十六歳

○一月八日。信濃戸倉の如本亭で句会（『寛政九年丁巳元旦 草庵日々稿 席杖菴』）。素柳、鳳秋、葛三、虎杖ら。

○一月九日。戸倉の六逕庵で探題句会。葛三、虎杖、和夕ら五人（同右）。

○一月十日。戸倉の宮本麦雨宅で句会。麦雨、葛三、虎杖、鵬羽ら八名（同右）。

○一月十二日。戸倉の素月宅で句会。葛三、虎杖、簾雨、丈馬ら十五名（同右）。

○一月十四日。戸倉の坂井可明宅で探題句会。葛三、虎杖、可明、鳥奴、麦雨ら九名（同右）。

○信州伊那に中村伯先を訪問、伯先の『ながめぐさ』（二冊）に次の句を寄せる。

霞にたましゐをうばゝれ花にこゝろをとばして伊奈の郡にとゞまる事日あり。しかも草枕の工夫さらに別事なく此日天  
竜の流に唇をぬらす。

風越や鴨の羽いろに春の行 東都 葛三

『ながめぐさ』の板下は葛三の筆であるが巻頭に葛三（発句）、伯先、一之、亀調、鸞岡、執筆による歌仙一卷を収録する。

○二月。信濃滞在中（祇因宛て鳥習ら書簡）。

○二月十七日。「秋暮（亭）」の名で武蔵本庄の長翠（小みの）宛てに手紙を出す。全集では寛政十年のものとしているが長翠の小蓑庵月並開始の記事があるから寛政八年が正しい。文中、春興（摺物であろう）の発刊、「此程は二七の会日など相定」めたこと「草庵のことは君の知り玉ふ如くなれば思ふにまかせぬ事多く」といった庵経営についての記事もみえる。

○八月二日。信州上田の成沢雲帯に手紙を認め九月十日の白雄七回忌法会への出席を依頼。雲帯欠席。かわりに三桃出席。

○八月五日。同じく上田の岡崎如毛に手紙を認む。

○九月十日。江戸鮫洲の海晏寺で白雄七回忌を催し記念の脇起百韻を興行。脇葛三、第三春鴻、鳥習、尋花、楚六、道彦、漣和、蓬谷、五芳、梅夫、一蕙、帰童、百爾、和柳、三桃、巢兆、燕市、蝶飛ら一順の付句で五十句手前まで進めたが葛三に特病が起り五十韻で中止。宗匠葛三、文台春鴻、執筆帰童、香元蓬谷、供花道彦、補助鳥習。

◎冬。『春秋稿』七編を刊行。半紙本二冊（天地）。飯高瀬陵序（漢文・寛政九年九月）、喬駟序（和文）、四時亭百雉跋（漢文。寛政九年秋。駿街散人帰童書）。七編は二度刊行された。本書は白雄の七回忌集を兼ねる。巻頭に前述の白雄七回忌記念脇起五十韻。文通で寄せられた追悼句三十三句。中には心遂、澧水、玉珂、三机、文下、半古、争茂、左十、翠雨、雲帯、麦二、如毛、星布、虎杖らの作品がみえる。次は「あくる日秋香庵よりのふみに莎径、利角、視幸、善兵衛、海晏寺よりとつてかへす。おのれ等池上の方に行く」と詞書する白雄立句による脇起一順表六句（燕市、巢兆参加）。次は九月十三日白雄忌春秋庵で行われた酒供養句会。白雄は酒豪として知られた。春鴻、百爾、和柳、棣花、楚六、鳥習、喬駟、みち彦、帰童、葛三ら十九吟。次は葛三が長野の柳莊、希言と巻いた歌仙。以下通例通り諸家による春の発句（季語別）で大巻は終わる。同門、門下のほかに士朗、鉄船、石牙、月居、猿左、蝶夢（亡人）、五明、旧国ら名家の句も収録される。

塊卷は夏―冬までの発句でやはり長斎、平角、春坡、重厚、蕉雨、蘭更ら他派の句も収められている。

▽五芳編『いぬ槇』（一冊）に巢兆、みち彦、五芳との歌仙と序文（黙齋葛三誌）、発句一句を収む。

▽伯先編『祭ぐさ』（白雄追善集。二冊）の板下を執筆。白雄の遺句「たち出て芙蓉のしほむ日にあへり」を立句に「名月ちかし露のみのむし」の葛三脇、以下帰童、鳥習、詩舫、みち彦、尋花、旦々、奚車、棗花、青藍、花毛、漣和、野言、雅輔、春鴻、莫二、楚六による歌仙、遺吟「鶏頭の濃も薄もあかきかな」を立句に雨塘、如帛、眉尺、莫二、成之、冬柱、瀬陵、葛三（途中から参加）による下総曾我野での歌仙を収む。これによると葛三はこの年曾我野に行ったことが判明する。同書の跋は葛三の執筆、発句は一句のみ収録。

▽猿左編『さざれ石』（一冊）、蕉雨編『万寿楽』（一冊）、星布編『美登里能松』（一冊）『七とせの秋』（一冊）、巢兆編『さしかた 二もと芒 小車』、耕淵編『はいかいよひの春』（一冊）に各一句入集。

寛政十年（一七九八） 三十七歳

○春。年々庵帰童に春秋庵を譲り鳴立庵主に専念する。其堂「春秋庵連」の春興（切紙形式。奉書二枚綴）を発行。一丁表に緑色濃淡二色摺の松図。裏から二丁表にかけて春興句。宝巷、千花、雨塘、棗花、舞石、大兆、眉尺、如帛、百雉、喬駟、冬柱、鳥習、蓬谷、尋花、漣和ほか三十五句。巻末に別格として春鴻、葛三、帰童。板下は帰童。『俳諧摺物図譜』七九〇所載。これによつて春秋庵主が帰童であることは明らかだが同時に信濃内山の艸花と石瀬、帰童三句入の春興摺（拙稿「岡崎如毛旧蔵の俳諧摺物（一）」所載<sup>3</sup>）が発行された。これには帰童の肩書きに「春秋菴裏」とみえる。「菴裏」ははふつう執筆を意味する。同年春中に執筆から正式に庵主に就任し前者を出版したものであろう。

○春。相模厚木連の春興摺に入集。厚木連は燕羽、玉珂ほか八名、巻末に葛三と春鴻の各一句がみえる。板下は葛三ではない（『俳諧摺物図譜』二二五）。

○春。下総曾我野連の春興摺に入集。連中は如帛、眉尺、雨塘ら七句。文通句として鳥習、帰童、葛三、春鴻、別格として冬柱が巻末を飾る。冬柱はかつて葛三の春秋庵執筆であったが、すでに独立していたものであろう（『俳諧摺物図譜』二



七)。

○十月十一日。無説の住職する幡ヶ谷の寺を訪れ、道彦、胡準、一蕙、梅夫、無説、五仏と歌仙を巻く。葛三は大磯から赴いたものであろう。


▽長翠編『黒祢宜』(二冊)に双鳥、巢兆、みち彦、葛三の歌仙一卷と発句二句入集。

甲州にて

夢山の曇るをしるか啼千鳥 江戸 葛三


曙や行燈きゆるうめの空

前の句によるとこれ以前に甲州へ行ったことが判明する。

▽漫々編『霜夜ほとけ』(一冊。相州として入集)、猿左編『誹諧発句帖』(一冊)、希言編『百物語』(一冊)、木海編『水』(二冊)に各一句入集。

寛政十一年(一七九九) 三十八歳

▽春。生方雨仕、鳥明に請われて江戸の松露庵主となる。記念集『はなのはる』(半紙本一冊)刊行。「鳴立庵葛三」として入集。

▽春。春秋庵帰童興摺「四海昇平」が発行される。タテ十九・三センチ、ヨコ五十二・五センチ。巻頭は雨塘、末尾は巢兆、春鴻、葛三、帰童。最後に「己未のとし 春秋庵社中」。

霞まねばならぬけしきを夕也 葛三

○夏。鳴立庵柴居七回忌に銀杏庵柴居が柴居号を継承、記念に『くらまふご』(半紙本一冊)を刊行。葛三跋文を執筆「しきたつ葛三」。叙来、トニ、葛三、左右、石馬による五吟歌仙、自来、兀雨、葛三、柴居、春鴻の五吟半歌仙、発句三句入集。本書の刊行は秋頃か。

○八月十五日。信州姨捨に遊び観月、虎杖、長翠、吐丈、雨紅、鳳秋、朴翁、超悟、丈馬、雄車、寛爾、蘭中、李井、布川、柴路ら三十二人が一座した（『寛政十一未夏 帟杖庵日々稿』）。

○八月。右の前後虎杖庵で探題。路帰、果冥、虎杖、圃桂、登雨も参加（同右）。

○八月二十九日。甲斐藤田の五味可都里へ手紙を出す。可都里の俳諧控『諸家文通発句集』にこの手紙に記されていたであろう秋五句がメモされる。また葛三の『春秋稿』七編（寛政九年刊）より多くの発句が抄出メモされている。

▽雨什編『ひとゝせ草』（二冊）、星布編『松の花』（二冊）に各一句入集。

寛政十二年（一八〇〇） 三十九歳

○春。帰童「春秋庵社中」の春興摺物（切紙形式。奉書）を発行。表の巻初三分の二に「俵屋宗理画」の小松野（小松六本とタンポポ、春霞の図。五色摺）の図がある。巻頭句は瀨陵（七十叟）と雨塘。裏に移り、舞石、家副、橘人、和柳、鳥習、漣和ら、巻末は柴居、葛三、春鴻、其堂の順。総勢三十六名。

うぐひすの宿なき野にも来りけり 葛三

○夏。信濃に滞在。長野の戸谷猿左の真間行の馬のはなむけをする（『手児奈集』）。

真間の継橋見にとて軽くしく立出ておはせし漱芳庵のあるじに馬のはなむけす

ままにせで歸りたまへや夏の中 在信中 葛三

○閏四月二十一日。信濃上田の岡崎如毛へ手紙を出す。文中月並（鳴立庵）募句のことがみえる。当時葛三は鳴立庵月並を催していた（拙稿「近世俳人書簡集十七」<sup>5</sup>）。

○七月二十二日。秋暮亭（鳴立庵）再建を志し、『秋暮亭再建寄附并諸入用紙』<sup>6</sup>を作り寄附を募る。世話人は葛三のほか宮河洞草、柳川芹径、佐藤丹人、柳田金鱗、鈴木東杏である。完成は翌年だが、同冊子はその寄付金品と支出支払が記されている。

○八月。虎杖が信州姨捨に師白雄の句碑を建立。碑面は江戸の書家松会平陵が書いているが、平陵を虎杖に紹介したのが葛三だったようである（拙稿「近世俳人書簡集 百七十六」）。翌年刊行の記念集『つきよほとけ』（半紙本一冊）には、春鴻発句（夏季）脇布留婦、第三左嚙、葛三、蓬斎の五人による信州松代徐柳庵における歌仙がある。句碑除幕のため春鴻、葛三も信濃に行ったものであろう。

○冬。同じく『つきよほとけ』に信州の蘭中亭で葛三、蘭中、虎杖が巻いた歌仙一卷が収められている。これも寛政十二年のものであろう。

○伊那の伯先がこの年毎月月並句合を主催。その毎月の高点句（一丁表裏）を一年分合綴、唱古の序文をつけて文化元年『恵羅美俱佐』として出版する。選は毎月二名の宗匠が行っているが、その四月と閏四月の間に一丁分「春秋庵評」と「暮雨巷評」がある。当時春秋庵は帰童（其堂）が庵主であるが、これは其堂号で別に二月分に出ている。他の選者の顔ぶれよりみて「春秋庵」は当然葛三でなければならない。不審である。選者を一月から順に列記すると道彦、可都里、其堂、蒼虬、瓦全、春鴻、長翠、月居、春秋庵、暮雨巷、丈左、雨什、重厚、鳥明、関叟、星布、虎杖、柴居、長斎、成美、自楽、完来、耕淵、百爾、升六、巢兆、兀雨、其水である。

○星布主催の句合『ふぐるま』の十名の選者となり選句。十名は丈左、重厚、虎杖、帰童、午心、完来、耕淵、春鴻、葛三、星布。

▽凡化編『鬼やらひ』（一冊）、蔑乎編『いはばな集』（一冊）、升六編『花見二郎』（一冊）、柳莊編『冬扇』（一冊）、天老編『梅蔵人』（一冊）、希言編『句きゝ花見』（一冊。二句収）、青岐編『さくら塚』（一冊）に各一句入集。

▽心随俳諧控『心随句控』（仮題。一冊。刊年無記、寛政十二年以前）に発句収録。

▽巢居編『さゞ波』（一冊。刊年無記・寛政期刊）に一句入集。

○寛政末期刊行の俳人番付（拙著『一茶の総合研究』口絵俳人番付A）に東方二段目七人目（最上位より十七人目）に掲載。

上位十七名を記すと二柳、完来、丈左、八千坊、月居、若翁、午心、玉屑、石蘭、巢兆、臥央、奇淵、升六、斗入、瓦全、蒼虬である。二流俳人といったところか。

享和元年（一八〇一） 四十歳

○三月十九日。肉親「釈尼妙好大姉」没。母であろうか（全集）。

○三月上旬。井上士朗、嶋立庵に葛三を訪うが留守で会えず（『鶴芝』初編）。肉親の葬儀のため信州に帰っていたためであろう。

○秋。大磯の嶋立庵（秋暮亭）再建。「当住葛三をうれしと覚えし」「金目の芦径、片丘の洞草、其外大いそ・小磯」（『風やらい』序）の人々の出資による。落成直前「露けくはあらぬ菴ぞ人ぢから」の春鴻の発句で葛三、芦径、洞草、トニ、馬門、叙来、燕羽、蓬谷、澧水、宣頂、玉珂、智邑、雉啄ら相模の門人、知友らによる百韻が巻かれた（『風やらい』）。

▽道彦著『鶴芝』初編のほか三編・四編及び坐来編『松露庵随筆』（二冊）、其堂編『春興』（一冊）、星布編『蝶の日かげ』（一冊）、卓池俳諧控『柏声舎聞書』（一冊）、虎杖編『つきよほとけ』（一冊）。歌仙二巻に各一句入集。

享和二年（一八〇二） 四十一歳

○春。種玉斎主催、鈴木道彦、葛三両評の「角力句合」が催されたのはこの年か。『俳諧摺物図譜』二六六にその高点句を記す書き抜きが収められている。両評合点で勝ち江戸の一蕙。道彦評の高点句は二十九句（上田の如毛、雲帯ら）、葛三評は十句（上田の市仙、炭樹、如蓬ら）。選者吟は

霞み来て履もぬらさぬワたり哉 葛三

○三月。長野県千曲市八幡の武水別神社奉納の句合の選者をつとむ。催主は信州佐久の春厚、仙丈、文花、草化、可麻呂、元夢、伯水、洋水、野秀、可道、露白、花溟、補助は戸倉の丈馬、佐久の家副、故園、選者は葛三のほか春鴻、道彦、虎杖である。題は四季の月。四句で入花二百文。三月締切。一人一句は額に掲載される。ちらしのみ現存し、実現したもの

かどうか額は現存しない。

○十月八日。雅彦と両吟歌仙（葛三自筆懷紙）。雅彦は『ありとし』によると長野市丹波島の人。発句は、  
藪陰の哥舞妓（マ）を覗く十夜かな 葛三

○十月二十五日。上田の雲帯へ手紙をかく。秋暮亭完成記念集『風やらい』の送り状。文中十月中に江戸へ出、金令舎道彦、春秋庵帰童を訪ねたがいずれも留守であえなかったことを記す。

○十月以前。『風やらい』刊行。半紙本一冊。春鴻序。跋なし。巻頭に既出の秋暮亭完成ま近の百韻。続いて桜の発句。中には士朗、月居、巢兆、双鳥、嵐外、宣頂、星布らの作品もみえる。「名処知名」として箱根、八重山、鎌倉、武蔵野等関東の名所の句を並べる。道彦、成美、碩布、大江丸、其堂らの作品もある。以下門人、知友らの四季発句集（季語別）。乙二、雲帯、五明、升六、重厚、兀雨、平角、如毛、麦二、冥々、坐来、可都里、素檠、鷺白、長翠、柳荘、伯先、虎杖らの作品も見える。巻末は相模の門人、知友の月の句を三十七句掲げ跋のかわりとしている。

○十一月。上毛太田の田山が催主となつて春鴻、葛三両評の句合を催す。季題は春の山、蟬、稲妻、草□の四題。入花百文。十一月末日締切。判後「梓にあらハし呈上」。補助役は掌石ほか一人。ちらしのみで結果は不明。

○冬。信州伊那郡上穂の中村伯先を訪問。伯先は記念として『あられ柿』を刊行。同書に

白雪に凍へもせずよ草枕

葛三

を発句とし、伯先、里朝、菊叟、梅ふる、文都良、唱古による七吟歌仙が収められている。『南向村誌』によるとこの伊那訪問の折、林介亭の家にも立ち寄っているそうである。

○十二月。戸倉の虎杖庵へ移り、姨捨帰りの鯨吹、世徳（坂城中之条陣屋役人）らと五吟歌仙を巻く。この巻は『雪つぶて』（享和二年刊。世徳校合）に収められる。

○十二月。虎杖庵で越年（希言宛て李井書簡）。

▽伯先編『報春鳥』（一冊）、吐文編『おほむかし』（一冊）、升六編『面目棒』（一冊）、白図編『三日月日記』（二冊）、芳之編『十府の菅こも』（一冊）、呉山編『無底籠』（一冊）、春漣編『あつみやま』（一冊）に各一句入集。

享和三年（一八〇三） 四十二歳

○一月元日。虎杖庵で迎春。

○一月。松代町の生家を訪うほか、同町の吉田李井等訪問（全集）。

○閏一月十三日。長野市五明の蘭中を訪問、未満歌仙（『いぬ榎』）。

○閏一月二十四日。松代から上田の雲帯へ手紙を書く。姨捨か千曲川の発句をくれと記す。まもなく雲帯より返事が届く。

○閏一月二十九日。右の返事を雲帯に認む。

○二月初旬。鳴立庵へ帰るか（全集）。

○二月十二日。郷里松代の先輩吉田李井没。葛三のちに追悼文を執筆。

○六月七日。春秋庵一門の後見者美濃口春鴻が他界。葛三悼句を作る。

○伊那の伯先のもとに滞在中の鳴立庵執筆雉啄（もと春鴻門人）が春鴻追善集『寢覚の雉子』（一冊）を刊行。葛三の発句二句を収む。

○夏。白雄十三回忌追善に海晏寺墓参、二句を作る（全集）。

○九月十三日。白雄十三回忌、追悼二句を作る（『葛三句集』）。

▽桐栖編『木魂』（一冊）、編者不明『左々栗』（一冊）に各一句入集。

文化元年（一八〇四） 四十三歳

○春。長野県千曲市戸倉自在社に虎杖門の治泉、可逢、草母が催主となり虎杖選書の俳額が上る。その巻末に「秋暮葛三」として一句大書。

○春。虎杖編『文化甲子春』（半紙本一冊）に葛三一句入集。本書を葛三編とみる説もあるが虎杖一門の春興帖である。

○春。鳴立庵境内にあつた法虎堂を葛三が再建、記念に施主自来（春秋庵系の江戸俳人）が『いれぶつじ（入仏辞）』（一冊。二十四丁）を刊行した。巻末に「秋暮」として葛三の一句を載せる。板下も葛三書（序は自来）。法虎堂は曾我十郎の妾で地元大磯の遊女虎御前を祀つたものでなかに三千風在庵の頃、江戸吉原の遊女たちが寄進したと伝えられる木像が祀られている。

○夏。相模の蓬谷（春鴻女婿）によつて春鴻の一周忌集『楚能千知或』（半紙本一冊）が刊行される。追善の春鴻立句脇起歌仙に葛三名残の花のみを付ける。「かねてきこへたる此業祀にさがたなきさはりありて三十四行のもとにとゞけば」とあり、通信による付句である。他に発句一入集。

○冬。伯先『香組草』（一冊）刊行。葛三板下を書く。発句二句入集。半歌仙を収むという説あれど不可。

▽鹿乙編『田にしつづ』（一冊）瀬陵編『瀬陵集』（二冊）、柴居編『蟬丸』（一冊）、一阿編『萩まつり』（刊年推定。一冊）、寛之編『ひかりづか』（一冊）に各一句入集。

#### 文化二年（一八〇五） 四十四歳

○春。昨年文化元年が改元と甲子が重なつたことを祝し『ありとし』を刊行。半紙本一冊。余綾源基（漢文。文化二年一月。壬峯為則書）序。自跋。発句は相模、信濃を中心に門人、知友の春の句を集む。澧水、玉珂、叙来、雨塘、五渡、碩布、星布、虎杖、乙二、長斎、升六、蒼虬、卓池、麦二、如毛、雲帶、魯恭、伯先、治泉、長翠、士朗、巢兆、成美、兀雨、恒丸、道彦、其堂などの句も収む。巻末は葛三の発句に叙来、ト二、左右、量可、亀石、百桂、鈴石、百亀による歌仙がある。このほか葛三の発句は一句。

○四月。長野県上田市の国分寺俳額（小島麦二願主）に一句掲出。

○閏八月。上田の岡崎如毛へ『ありとし』を送る。如毛家の不幸に悔みを述べ「不遠中罷下り拝顔に御悔は可申上」と記す

(拙稿「近世俳人書簡集十八」<sup>8)</sup>。

○十一月晦日。上田の如毛宅を訪い悔みを述べ、あわせて葛三発句で如毛、雲帶、露蓋(如毛息)、争茂、半古の六吟歌仙を巻く(葛三自筆懷紙)。

橘の見ぬ寒さをも雪の宿 葛三

▽景雄編『曙の雲』(一冊)、其朝編『ふぐるま』(一冊)、碩布著『穂屋祭記行』(一冊)、坐来編『松露庵隨筆』(一冊)、有斐編『画賛句集』(仮題。一冊)、花城編『復古集』(一冊)に各一句入集。

文化三年(一八〇六) 四十五歳

○二月三日。鳴立庵で前句付の大会があつたと伝えられているが(全集)蕉風の葛三が雜俳に手を出したとも思われない。

○十月十八日。鳴立庵前庵主三浦柴居の十三回忌に柴居の遺吟を発句に脇起歌仙を巻く。脇葛三、以下丹人、三千磨、桂露、東杏、金鱗、まさし、未人の八吟。

○十月。かつて信州中之条代官所の役人であつた鯨吹が江戸で虎道と改号、記念の摺物を発行。葛三の一句を収む。

○十一月。柴居十三回忌追善集『頓写のあと』刊行。半紙本一冊。鈴木道彦序(文化三年十月)、跋はない。巻末に「文化三年霜月上梓」とある。巻頭に先述の柴居発句の脇起歌仙。つづいてやはり柴居遺吟による叙来、左右、卜二、量可、鈴石、百桂、石馬による脇起歌仙。次も柴居遺吟による麻仏、笈鼠、田陶、虎嘯、なか勢、沙啓による脇起歌仙。以下相模俳人を中心とした四季の発句が並ぶ。中には嵐外、碩布、伯先、雲帶、鳳秋女、家副、升六、椿堂、みち彦、其堂、雨塘、巢兆、虎杖、尺艾、対竹、長翠、乙二、玉珂、澧水、宣頂、士朗、長斎、如毛、魯恭、乙因、成美などの句もみえる。葛三は一句だけである。

○十二月一日。摂津の春人宛てに『頓写のあと』を送る。その手紙の模刻が没後天保十二年刊、梅左編『俳諧文章車』(横本一冊)に収められている。春人の句は『頓写のあと』に一句収録されている。



▽虎杖俳諧控『文化三丙寅春日 虎杖葺艸稿 執筆』（一冊・五句入集）、編者不詳『春帖』（一冊）、緩貢・一雄編『こけのつゆ』（一冊）に各一句入集。

#### 文化四年（一八〇七） 四十六歳

○九月か。白雄十七回忌の記念に鳴立庵境内に「吹つくし後は草根に秋のかぜ 白雄居士」（葛三書。他に刻銘なし）の句碑を建て記念集『はいかいくさがね集』一冊を刊行。同書の巻頭に建碑記念の歌仙があり、その発句（葛三）は秋であり、また白雄の命日は九月十三日であるから建碑も九月のことと思われる。

○冬か。右の記念集『はいかいくさがね集』刊行。半紙本一冊。序文は未人か、無署名（葛三ではない）。跋は金令舎道彦。板下は跋文以外すべて葛三。巻頭に葛三発句による記念の三十一吟歌仙がある。すべて相模の俳人たちであるが、出資者でもあろう。脇は未人、第三は暮玖、名残の花は芹径である。次に道彦、葛三、一蕙、胡準、護物、菊処、秋守、翠嵐、木父、無説の江戸で巻いた十吟歌仙。葛三が秋江戸に行ったことが知られる。次に道彦の発句を掲げる。

我に似て酒のミならへ梅の花　ときこえし人の十七年忌弔ふけふにも膝のうへはなちたまハざりし盃のまぼろしにのこりてわすられざりければ

嘘とても新酒はくまじしらを来る　みち彦

酒豪白雄の俳がほうふつとする。

以下秋、冬、春、夏の順で季語別の諸家発句が続く。内容上相模人の作品が多い。澧水、玉珂、星布、長翠、五渡、治泉、家副、馬門、升六、虎杖、乙二、成美、兀雨、碩布、雨塘、みち彦、其堂、護物、鳥習、麦二、杉長、菊也、長斎、蒼虬、魯恭、月居、宣頂、伯先、嵐外、対竹、素檠、卓池、如毛、雲帶、士朗、椿堂の例の高名な人々の作品も含まれている。末尾は葛三と相模の人々の歌仙三巻であるが、第一巻は

ふし見屋別荘

さゝ竹をより処なる月見かな 葛三

以下鈴石、叙来、百桂、亀石、左右、牛仏の七吟。次は

秋暮亭

待宵の雨といハセぬ庵かな ト二

を発句とする芦径、百亀、鳥流、暮玖、葛三、丹人、帰山の八吟。次は

梅沢の松ふく風をきかんにハそこの川句といふ処こそおかしけれ、春色もことにとゝのひてかぎりなき幽玄の地なり。

山主のあざりをそゝのかして人くひと夜あかす、その夜の聯句、

啼蛙かハらぬ顔をうかべたり 葛三

以下虎嘯、麻仏、田陶、千可勢の五吟。

○同じ白雄追善集『いぬ榧集』（二冊）が虎杖の手で刊行。葛三の発句二句と享和三年春、信濃滞在中蘭中と巻いた未満歌仙（二十二句付合）が収録されている。

○九月。同じく長野市御幣川の白雄門人野暁が白雄追善の摺物（冊子仕立）に「文嘯」として葛三の一句を収む。

▽柑翠編『まことがほ』（二冊）、雄淵編『霜の蜂』（一冊）、杉長ら編『花声集』（一冊）、素檠編『続雪まるけ』（二冊）、茂良編『びわぶくろ』（二冊）に各一句入集。

文化五年（一八〇八） 四十七歳

○秋。信州川中島連の秋興一枚摺に入集。其杖、渚柳、茂卿、呂水、波久藻、文好、蔓文山、黛山、其松、野暁、巢兆、其堂。

油断せば葛にも荒ん脊戸の秋 葛三

菊の俳画がある。『俳諧摺物図譜』二〇七。

○冬。安芸広島が多賀庵玄蛙が松島旅行の途時鳴立庵を訪れ五日滞在した（玄蛙編『萍日記』）。

鳴立沢に杖を留ること五日

旅の日は鴨の脛にも似たりけり 玄蛙

風の吹かばふけとて椿さく 葛三

▽琴州編『みのむし』（二冊）、太節編『いぬこきむ』（二冊）、梅価編『俳諧花鳥目付集』（二冊）、眉山編『身滌集』（二冊）、奇淵編『東国』（一冊）。『西国七部集』のうち、千影編『霜のかね』（二冊）、編者不詳『俳諧枇杷の実』（一冊）編者不詳『木葉集』（全集による）に各一句入集。

# 註

- (1) 生家の所伝という（『葛三全集』清水瓢左編著。葛三顕彰会発行。昭和四十二年十一月）。
- (2) 清水瓢左編著『葛三全集』。
- (3) 「二松俳句」二十四号所載。平成十八年七月六日発行。
- (4) 拙稿「俳諧一枚摺」（「二松俳句」十九号。平成十五年十一月二十六日発行）。
- (5) 「くらげ」四一七号。昭和六十年六月一日発行。
- (6) 「神奈川叢書」第八編『鳴たつ庵縁起 付鳴たつ金石誌 秋暮亭再建寄附并諸入用紙』（石井光太郎解題、校訂。昭和四十四年二月十五日。神奈川叢書刊行会）。
- (7) 「くらげ」五百二号。平成四年六月一日発行。
- (8) 「くらげ」四一八号。昭和六十年七月一日発行。